

## 上海雑技団のイリュージョン

### 1 中国駆け足旅行

1988年夏。当時中国は、経済発展の兆しを見せ始めていた。中国を見ずに対中ビジネスの支援もできない。ちょうど、若い友人のポールが、中国を旅行するという。彼にお相伴する形で、上海、北京、西安、桂林を駆け足で巡った。

初めての中国の旅は、のっけからつまずいた。夕方に上海から北京へ飛ぶ筈の飛行機が、何時になんでも飛ばない。3時間、4時間と待ったが、英語のアナウンスもなく、様子が分からぬ。

イライラして待つうちに、夜は更けてくる。「このまま欠航になつたら、どうなるのか」とさすがに不安になつた。ただひたすら待ち続けて7時間！

夜遅くやつと代替機が出発したが、北京着は深夜の予定。頼んでおいたガイドも待つていなうだらうし、ホテルへの行き方も分からぬ。「タクシーも深夜にあるだらうか？」と不安は増すばかり。

北京空港への到着は深夜一時。有り難いことに、こんな時間にもかからず、ガイドのキュウさんが待つてくれた。キュウさんの人なつこい笑顔を見て、わたしたちもひと安心。

北京は、今から3000年前に栄えた燕の国の首都で、その後長い間、中国の中心でした。かつて、マルコ・ポーロがこの地を訪れ、その壮大さに驚嘆しました…。

キュウさんはホテルへの車中で、早速日本語でガイドをしてくれる。

翌日、おきまりの観光スポットの見学。映画「ラスト・エンペラー」の舞台になった紫禁城、天安門広場、人民英雄記念碑、革命博物館などを訪れた。

### 2 万里の長城にて

午後、わたしたちは八達嶺の万里の長城を訪れた。万里の長城の起源は、春秋戦国時代に遡る。侵入を繰り返す外敵を防ぐため、秦、漢、明代の皇帝たちは長城を築き、補修・改修を繰り返した。長城は、山の尾根沿いに、遙か彼方まで延々6000キロに及ぶ。日本列島の2倍

の距離である。

長城の高さは8.5メートル、城壁の上は5.7メートル幅の通路で、100メートル間隔にのろし台がある。山並みを貫いて走るこの巨大な蛇の流れは、まさに「人類の遺産」というにふさわしい。

空は青く澄みわたり、涼風が吹きわたり、緑深い山並みの上に果てしなく長城が続く。今でこそ外国人や観光客が訪れ、平和な風景だが、この長城は数千年にわたって繰り返された侵攻と殺戮の場である。

### 3 空中に浮かぶ気功師？

2日間北京で遊んだ後、わたしたちは西安に飛んだ。<sup>せいあん</sup>

西安は唐代の長安の都で、各国からの商人が集まる国際都市だった。シルクロードの出発点としても有名である。今も残る当時の古い城壁が昔の面影を伝えている。

華清池で、玄宗皇帝と楊貴妃のロマンを偲んだ後、わたしたちは秦の始皇帝の墓を訪れた。かつては、豪華な地下宮殿が造築され、宝石で描かれた星座、水銀を流した大海が作られ、永遠の燭がともされていたという。だが、80メートルほどの丘陵の上は、今は散歩道になつて、かつての栄華を偲ぶすべもない。

午後たまたま時間があいたので、市内の演芸場に飛び込んだ。

ちょうど気功師が口上を述べていた。80センチほどの高さの椅子を、2メートルの間隔をあけて並べ、その間に紙を張り渡す。精神を集中し、天に向かって気を放つと体重が軽くなり、気功師は紙の上を歩くことができる。そういうふれ込みである。

気功師は軽く黙想して精神を整える風だったが、やがて静かに歩き始める。

観客は今にも紙が破れるのではないかと、息をのんで見つめる。薄い紙は破れそうで破れず、とうとう気功師は紙の上を歩ききった。途端に観客から大喝采が起こる。

若い頃、わたしは合気道の同好会に入っていた。高段者も名人の「気」にひとたまりもなく転がされるのを何度か見たので、ある種の気の存在をほんやりと信じていた。

しかし、この芸はマユツバものである。演芸場は光を落としほとんど暗闇。舞台の背後にも

黒い幕が引いてあり、気功師だけがハイライトのなか浮かび上がる。舞台設定からして怪しい。

怪しい点は外にある。特殊な強化成分でできた「紙」なのか、紙に似せた他の材質なのか、ピアノ線でも使って気功師は空中に浮いているのか。ネタは分からなかったが、トリックであることは間違いない。

#### 4 漓江下り

西安を後にして、金木犀が咲き乱れる桂林を訪れた。「桂林山水甲天下」（桂林の風光は天下一）と讃えられる、中国屈指の観光地である。

桂林の「桂」は金木犀（桂花）のこと。桜の木ほどの大きな金木犀が、黄金色に輝き、街中に甘い香りを放つ。

翌日は早速お目当ての漓江下り。3億年前に、石灰岩が沈積していた海底が隆起し、針のような奇峰が両岸に無数に屹立する。竹江（チュージヤン）から100人乗りの大型船に乗り、陽朔（ヤンシャオ）までの5時間の船遊び。その間奇岩、奇峰の連続で飽きることがない。

浅瀬をゆっくりと下っていくと、水牛が遊び、子供たちが水浴びをし、漁師たちが投網で魚を捕まえている。エメラルド色の深い川と緑の奇峰が続き、まるで水墨画の世界である。何というのどかでのびやかな世界だろう。確かに人々は貧しいが、貧しさの中にゆとりさえ感じられる。

わたしのように6分刻みのタイム・シート（業務日誌）をつけて、仕事に追われていると、いつしかゆったりとした生活を忘れてしまう。時間は人間の創り出した「共同幻想」にすぎないが、長年アスファルト・ジャングルの中で仕事を続けていると、いつのまにか時間に使われ、自分を見失ってしまう。それが一生続く！

#### 5 上海雑技場にて

桂林の自然を満喫した後、わたしたちは帰途再び上海に立ち寄った。上海は天然の良港に恵まれ、貿易と金融と商業の一大中心地である。アヘン戦争後長く外国の支配の下にあったが、

解放後は中国随一の発展を続いている。

わたしたちは、まっすぐ上海雑伎場に向かった。

目当ては中国随一といわれる上海雑伎団の公演。雑伎は日本のサーカスに近いが、手品、魔術、動物芸、曲芸などの大道芸の粹を集めたものである。

上海雑伎団は雑伎団の中で最も人気が高く、切符も手に入りにくい。わたしたちは、幸い、最前線の席を取ることができた。

パンダの曲芸は、世界でもここでしか見られない。椅子に座って食事をしたり、寝転がってボール蹴りをしたりする愛敬のある芸に、観客は拍手喝采。

芸人たちの妙技もつぎつぎと披露される。3人で人間ピラミッドをつくりながら両手で8個の皿を回す皿回し、飛び板でジャンプしながら人間が5人肩車を組み積み上げていく「大跳板」など、オリンピック選手でも真似できないであろう。つぎつぎに繰り広げられる妙技に雑技場は喝采につぐ喝采であった。

## 6 檻の中の虎が消えた！

だが最もエキサイティングだったのは、虎を消すマジックだった。

わたしの目の前の3～4メートル先に虎の檻が運び込まれた。2メートルほどの虎は、狭い檻の中で歩き回っている。檻は、高さ2メートル、横5メートル、奥行き3メートルほど。

上海雑技場は円形である。満員の観客が四方八方から虎の檻を見つめている。檻は4本足の大テーブルの上に置かれているから、向こう側が丸見えである。

やがて口上が終わると、檻全体にシーツがかぶせられ、一瞬の気合いと共にシーツが取り払わた。すると、檻の中の虎が忽然と消えていた！

それは本当に信じられない光景だった。目の前の数メートル先で、虎が消えたのだ。トリックであることは分かっているが、わたしは自分の感覚さえ信じられなかつた。

わたしは中国語を知らないから、催眠のトリックにかかるわけはない。四方から人が囲んで見ているから、鏡のトリックを使ったとも思えない。上下左右どこを見ても虎を隠すところはない。

いくら考えても、どうやって虎が消え、虎がどこに行ったのかわからない。ただ一つはっきりしているのは何か超常的力が作用して「虎が消えた」のではなく、マジシャンがトリックで「虎を消した」のである。「事実」と「虚構」の差は本当に皮一重である。

職業柄、つねに事実をどう確認すればよいかが、悩みの種だった。依頼者がAといつても、相手はBと主張する。依頼者のいい分を丸呑みして裁判を進めると、ひどい目にあう。依頼者がどういうかではなく、裏付ける証拠があるかどうかが、裁判の行方を決める。

## 7 感覚は人をだます

わたしは見た事は信じられなかった。観光気分のノリで出かけた雑技見学だったが、帰国から1年近く、わたしは改めて「事実」とは何かについて考え続けた。マジックのビデオを何本も買い、イリュージョンの本を読みあさった。自分の見たことが信じられないなら、法律家の仕事のベースである「事実の確定」さえ危うくなる。事実と思っていいいた事がウソだったら、裁判の進め方にさえ影響する。

こうして至った結論は、「プロが日々命がけで開発したトリックは、素人には決してわからない」ということだった。プロの詐欺師にかかるには、法律家でさえ簡単に引っかかる。

そんなことを考え続けて至った結論は、「物事を即断しない」「感覚を信じて判断しない」という事だった。

結論を出す前に、もう一度、懐疑のフィルターを通して、自分の考えを疑う。感覚より、理詰めで物事を考えることを優先する。その大きさを肌身で知った。虎が消えた意味は意外に深かった。